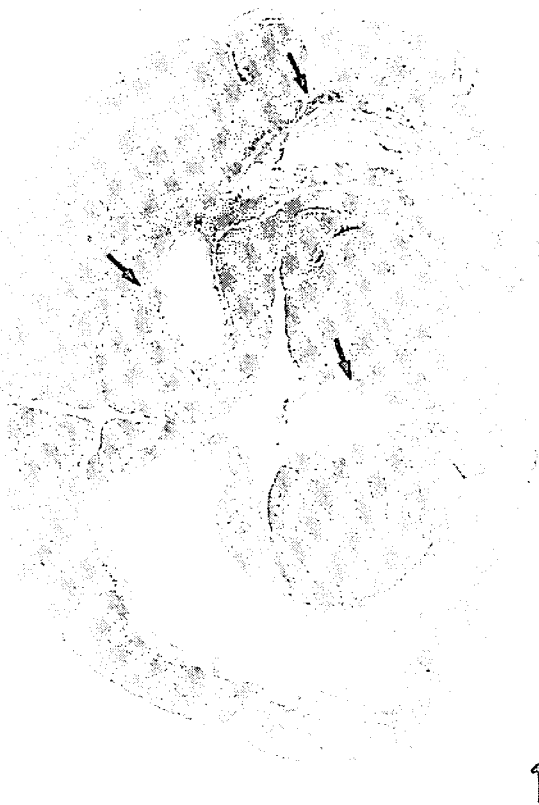


# ネコのプラズマ細胞性上衣脈絡髄膜脳炎

東京大学農学部家畜病理学教室出題 第17回獣医病理学研修会標本No.261



動物：ペルシャ猫，♀，13ヵ月令。

臨床所見：1975年12月開業医のもとへ来院，ぶどう膜炎の診断のもとに抗生物質などによる局所の治療が続けたが効果がみられず，1976年5月頃失明，この間，食欲不振，沈うつ，発熱，下痢をみとめたが，とくに神経症状には気づかず，1976年7月30日に死亡。

肉眼所見：うっ血性肺水腫のほか，眼と脳に病変がみられた。両眼とも結膜はやや充血し，角膜白濁，前眼房に半透明粘稠液が充満していた。脳膜血管はうっ血，内水頭症を呈し，側脳室，第3脳室，中脳水道，第4脳室の拡張が著明で，透明，卵白様の絮状物を含む約5mlの粘稠な脳脊髄液をみとめた。-70℃に保存された脳脊髄液は，色素試験でトキソプラズマ抗体陰性，細菌検索で少数のぶどう球菌が検出されたが材料採取時の汚染と考えられた。脳脊髄液の蛋白濃度は2.9g/dlに達し，免疫電気泳動でアルブミンおよびIgG分画の著明な増加がみとめられた。

病理組織学的所見：提出標本では写真1（矢印，H-E染色，×2.4）に示すごとく拡張した側脳室および第3脳室壁から腰髄にいたるまで脳室中心管に沿って広汎に病変がみとめられた。漿液，線維素の滲出，ときに化膿性変化や壊死と，リンパ球，プラズマ細胞，マクロファージの浸潤を主とし，線維芽細胞，結合織線維あるいは毛細血管の増生もみられ，病巣および周囲には神経細胞の変性およびアストログリオーシスがみられた（写真2，

H-E染色，×280）。髄膜および脈絡叢のリンパ球，プラズマ細胞の浸潤も著明で，髄膜の変化は脳底部に強かった。実質の変化は軽微であったが，研修会の席上指摘されたように，外側膝状体の神経細胞は変性し，細胞質に好酸性の封入体をもとめた。脳梁部においては浮腫性的変化が強く，神経線維は変性，断裂し，変性したアストログリア細胞が介在していた。病巣部血管，とくに静脈の変化は顕著で，小血管壁および周囲には浮腫，変性ともにリンパ球，プラズマ細胞の浸潤が著明であった。

提出標本以外の部位でも髄膜，脈絡叢，脳室壁に同様の病変をみとめ，また，第4脳室のLuschka孔，クモ膜下腔には滲出物や壊死細胞残層が充填していた。眼球では角膜内膜炎，ぶどう膜炎，軽度の網膜炎がみとめられた。

診断：本例は，①PAS，チオニン，Gram染色などで病巣および付近に真菌，原虫，細菌など有意な病原体が検出されず，臨床的にも抗生物質などの治療が無効であったのに対し，②上衣，脈絡叢，髄膜などにおける表在性の増殖性炎，血管炎および血管周囲炎が著明で，③脳および眼球の病変が特徴的であり，これらの所見は，Finn (1972)，Krum, Johnson and Wilson (1975)らにより報告されたネコ伝染性腹膜炎の亜型ときわめて類似し，FIPウイルスによる内水頭症が強く疑われ，プラズマ細胞性上衣脈絡髄膜脳炎と診断された。